



The end of the polluted world.

毒を
吸う
街

作：布団 兎

目次

毒を吸う街	1
-----------------	---

毒を吸う街

揺れる。

光る。

崩れる。

これが、世界が望んだ光景か。

誰がこれを望んだだろうか。

この光景を。

「行ってきます。」

誰もいない家に向かってそう呟くと、玄関を開ける。5月の晴れやかな陽射しのもとに出ると、目の前には一気に視界が広がる。

小高い丘の上にある我が家から見える街。
眼下に広がる風景はごく普通の街並み、
しかしその中にたった一つ、圧倒的な存在感、そして違和感を放つ巨大な建造物がある。

明るい陽射しを浴びてきらきらと輝く、巨大で透明な箱のような建物の中に、私の兄はいる。

ふと昔のことを思い出し、胸に締め付けられるような痛みが走る。

兄がいた頃。両親がいた頃。楽しかったあの時。

そんな気持ちを振り払うように、否が応でも目に入ってしまうその建物を見ないふりをして、私は学校への道を走り出した。

「えー、皆も知ってる通り、この世界は常に、『DT29』によって侵される危険と共にあります。しかし、それを防いでくれているのが、このN国の首都であるわが町に存在する『デポルーター』です。」

今や子供でも知っている常識、それをわざわざ学校の授業で教えることは、これが普通であると、国民に思い込ませるためなのだろうか。

そんな考え方をしてしまうのは、私の兄が、『換者』だからだろうか。

私の胸に、古傷が開くような疼痛が響く。

20XX年、世界では産業発展に伴い、ある有害物質が問題となっていた。

『DT29』。

G国の科学者によって発見されたその物質は、その材質、起源に関わらずあらゆる物を『崩壊させる』ことから、別名『死の胞子』とも呼ばれている。

そして実際に12年前、DT29がU国で大量に発生、放出されてしまう事故が起こると、当然ながら近隣であるこのN国にも被害は拡大、多くの公共施設や人々の命が奪われた。

私の両親もその事故によって命を落とし、私と兄だけが生き残った。

「アイバさん？ 聞いていますか？」

「はいっ！」

物思いに耽っていた所を見事に指されてしまった。

「私が今なんて言ったか、言ってみなさい。」

「・・・すみません」

「まったく、いいですか？ 現代、私たちが健康に日常生活を送れているのは、10年前に建造された『デポルーター』、そしてその中でその身を捧げてくれている『換者』の方々のおかげなのです。」

天高く輝く透明な天井、そびえる無色の壁。
本来なら圧迫感のあるこの場所で、息苦しさを微塵も感じず、むしろ清々しささえ感じているのは、この施設の輝きのせいだろうか。

それとも、俺がこの場所に慣れてしまったからだろうか。

大きく伸びをすると、朗らかな陽射しのもとで『外の世界』を眺める。
そうして平和を実感することが、俺の日課だ。

しかし、外界の風景は嫌でもあの頃を振り返らせる。感傷的になるのは柄じゃない。

12年前の事故を受け、当時環境保護先進国だったわがN国は、ある法律を制定した。

『環境換者集約法』だ。

そもそも12年前の事故で、
DT29に『耐性のある人間』が存在することが判明したのだ。

そこでN国は、10歳以上の全男子国民に検査を実施。その検査で耐性があると診断された国民は、N国政府によって特殊な装置をつけて、ある建造物に隔離される。

その建造物には世界中を舞っているDT29が吸収され、中で隔離された人々がそれを呼吸し換気する。

いわば『世界の空気清浄機』という訳だ。

その建物こそがこの『デポルーター』であり、その中に隔離された『耐性あり』の人々こそが『換者』なのである。

自分自身、10歳で『換者』としてこのデポルーターへと入った。

たった1人残してきた妹は元気だろうか。

デポルーター内では外界への未練を持ち込まぬ為だろうか、親族や友人との連絡も断たれている。

周辺への一般市民の立ち入りも厳しく制限されており、透明な壁に反して、そこには深い溝があるのだ。

『世界を救う英雄』。

その言葉とは裏腹に、人々は換者を忌避している。

ガスマスク越しの風景は、歪んで見える。

それから2ヶ月ほど後、

それは、あまりに突然の知らせだった。

『政府により採択されたのは、

[改訂環境換者集約法] 法案です。世界全体のDT29の空气中濃度が生存限界に近づきつつあることから、我がN国のデポルーターのDT29吸収量を、約2倍に増やすという計画です。』

突如後ろから頭を殴られたような錯覚に陥る。

視界がゆらゆらと揺れ不安定になる私の耳に、無機質なニュース音声で情報が流れ込んでくる。

『政府はデポルーター内の換者の身体に影響はないとしていますが、国内外の専門家からは懐疑的な意見も寄せられています。』

しかし、この計画に対して諸外国からの期待の声大きいのも事実であり、早急な議論が求められています。』

頬を冷や汗がつたい落ちる。

うるさいくらいの静寂が、私を孤独に包んでいた。

その日から、日常は大きく変わった。

[改訂環境換者集約法] 法案を巡って、世論は『換者擁護派』と『計画推進派』に真っ二つに割れた。

N国だけでなく世界の各地でデモ活動が活発化。

当然N国内が安定しているはずもなく、デポルターを抱えるこの街も、至る所で煙や怒声上がるようになっていた。

私たちのような学生はその混乱を避けるように通学し、できる限り通常の授業を試みた。

しかし付近でのデモ活動や政府軍との小競り合いは留まるところを知らず、世間に満ちる不穏な空気は確実にかつての日常を飲み込んでしまった。

家路につきながらそんなことを考えているあいだにも、遠くで何かが炸裂する音、人の声、パトカーのサイレンがこだまする。

最近ではデポルター付近での暴動やデモが多いらしいので、そちらの方だろうか。

車のフロントガラスの破片。

法案反対のビラの切れ端。

元はなにか分からないほど燃え尽きた何か。

ひび割れたアスファルトの地面に、人々の反抗の跡が、対立の傷が、散乱している。

いつからこんなことになったのか。

2ヶ月前に法案が提出されてから？

違う。

DT29を、この街が、『換者』が、請け負うようになってから。

この街に、デポルターが建った時から。

すでに、何かが歪んでいたのだ。

人々の視点も。世界のバランスも。

誰も気づかない歪みが、誰も気づかない透明な箱の中で、肥大し続けていたのだ。

誰も気づかなかった。

毒を吸い続けたこの街が、崩壊を始めるまで。

涙が溢れる。視界が滲む。

その瞬間、

地を揺らすような轟音と共に、

空気が震えた。

透明な壁の向こうは、相変わらず静かだ。

俺がアイバリイチから『換者 079』としてここに来てから、何も変わらない。

しかし、本当は気づいている。この街は2ヶ月ほど前から騒がしい。人々の怒号や、パトカーのサイレンがよく聞こえる。

毎日眺めていた風景のどこかで、いつも煙が上がっている。

『外の世界』が揺れているのだ。

次の瞬間、視界が真っ白になった。

轟く爆音に、デポルーターの透明な壁がピリピリと震動する。透明な壁の向こうから、アスファルトを捲りあげるような風圧と共に赤い炎が高く上がっているのが見える。

その向こうには外界の人々。彼らの持つ横断幕には、

『この街を混乱に陥れるデポルーターと換者は、この街から出ていけ！』

ああ、人々はずいに堕ちたのだ。

忌避と畏怖に満ちた視線を向けていた、この毒を吸う街の人々は、あまりに大きすぎた

混乱に飲み込まれ、

換者に、刃を向けるようになってしまった。

怒りの声を上げる、絶望して祈り始める、呆然と立ち尽くすしかないデポルター内の換者たち。

『外部の人間の侵入を確認外部の人間の侵入を確認』

けたたましいアラート音が鳴り響き、政府の軍隊が武装を展開する。
ボールや鉄パイプを持った人々が、ジュラルミン製の盾を持った隊員たちと衝突する。

発煙筒から上がる煙、爆発によって散らばった炎が至る所で燃え上がっている。
黒いフルフェイスのヘルメットに炎が映り、人々の顔を赤いライトが照らす、誰もが悪魔のようだ。

非常事態を知らせる赤いライトが照らし出す外の世界は、地獄絵図だった。

ああ、こんなにも、外の世界は知らない間に歪んでいたのか。

駆けつけた時には、そこはすでに混沌の渦中だった。

立ち上がる煙のもとに近づいていくたびに、強くなる熱と不安。それに耐えながら、必死に走ってきた私の目の前には、ずっと遠くから見ていたデポルター。

近くで見て始めて実感する。

こんなにも大きかったのか。

世界中の毒を吸うこの巨大な透明な箱の中に、どれだけの DT29 が封じられているのだろう。

そのデポルターの前では、まさに暴動の最中だった。至る所で燻る煙が視界をさえぎり、突然大きくなる炎が汗に濡れた頬を焦がす。

人々の怒号、ジュラルミンの縦と人々の武器がぶつかる鈍い音、炎が空気を焦がす音の中を、必死で走る。

兄に、会うのだ。

あの日、突然目の前からいなくなった兄に。

「やあああっ!？」

ゴルフクラブを持った男に突き飛ばされ、地面を転がる。肘が地面と擦れて血が滲む。ここまで走り続けて疲れきった身体が、ズキズキと非常事態を告げる。

それでも、

会わなければならない人がいる。

「ううっ!!」

立ち上がろうとした私は、再び起こった突き上げるような揺れに倒れ込む。

右手の方で今までで1番大きな爆発が起きる。

火の手が上がり、人々の悲鳴がこだまする。

デポルーター制御施設の誘電機に引火して、爆発が起きたようだ。

そしてとどめを刺すように、轟音が上がる。

地獄のような光景に絶望した私の目の前で、デポルーター内の送電塔がゆっくりと傾いていく。

そして速度を増した送電塔がデポルーターの壁に激突する。

内側から一瞬ヒビが入り、

つんざくような音と共に砕け散るデポルーターの透明な壁を見て

私は

世界の歪みが

今ここで限界を超えたのだと知った。

透明な壁の向こうで、初めよりも激しい爆発が起こり、蛇が飛びかかるように大きな炎が立ち上がる。

悲鳴をあげて逃げる人々。なかには服に火がついて転げ回っている人もいる。

その時だった。

デポルター内では最も高い建造物である送電塔。

それが青い火花を散らしながらゆっくりと傾いていく。

換者も、人間も、その時全てを理解しただろう。

それだけの時間を十分に与えて加速した送電塔は、内側からいとも簡単にデポルターの壁を打ち砕いた。

空が、燃え上がるように赤く、ただひたすらに赤くなる。

太陽を遮るように灰色の雲が湧き出し、真っ赤な空がどんどん広がっていく。

世界中の毒を集めたこのパンドラの箱は開かれてしまった。

DT29 が、大量に世界に拡がっていく。

争っていた人々も静まり返った。

次第に聞こえてきたのは、

すすり泣く声。

祈る声。

絶望の淵で呟く小さな声。

それはどんな爆発音より、どんな怒号より、
どこまでも響き渡る。
小さくて大きい叫びだ。

街の中心部の高層ビルが、最上階から、何かに蝕まれるように崩れ始める。

砂場に作られた砂の塔を、子供が蹴散らし壊すように。

丁寧に積み上げられた積み木が、ゆっくりと傾き倒れるように。

街が。

人が。

建物が。

世界が崩れていく。

リサはゆっくりと歩き出した。その指先は灰色に染まり、今にも崩れ落ちそうだ。

実際、彼女の周りの人々は、腕がない。

脚がない。

静かに終わるんだな、とりサは思う。

崩れたデポルターの破片を踏み締めて、歩いてゆく。

揺れる視界が、限界を知らせる。

それでも彼女はたどり着いた。

目の前にいるのは、兄だ。

リサはゆっくりと微笑んだ。

9年ぶりの妹を前に、レイチはガスマスクを外す。

この街は毒を吸いすぎてしまった。
世界中の毒を。

世界は、
誰にも見えない、でも誰もが見える透明な箱の中に閉じ込め、見ないふりをしていた。

その箱の中で、歪みがゆっくりと育ってしまった。
誰も気が付かないほど静かに。

でも、それももう終わる。

リイチは微笑んで、膝から崩れ落ちるリサをそっと抱きしめる。
リサの腕はもう半分は灰色に凍っている。
膝ももう力は残っていないだろう。

徐々に静謐に包まれていく世界。
空の赤は時間を追うごとに濃く、深くなっている。

世界全体が毒に包まれ、終わる時。
終焉の中心で、リイチは微笑んでいた。

どこまでも赤い空を見上げて、全てが無くなる時を、静かに待っていた。

今、ガスマスクを外して見た世界は、もはや歪んではいなかった。

END

{{
-}}

毒を吸う街

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
